



栗田匡相
(くりた きょうすけ)

一橋大学経済研究科にて修士号、博士号(経済学)を取得。国連大学世界開発経済研究所客員研究員を経て、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科助教。開発経済学を専攻し、世帯、個人、企業といったミクロレベルのデータを用いた実証分析をタイ、フィリピン、インド、スリランカ、中国、ミャンマーなどを対象に行ってきた。

シリーズ

東アジア

[IAS 毛里研究プロジェクト]

ネットワーク解析

データで紡ぐアジアのビジョン： RUNASIA 始動

プロジェクト設立の経緯

早稲田大学21世紀COE「現代アジア学の創生」(拠点リーダー・毛里和子教授、2002-06年度)傘下の次世代研究者プロジェクト「東アジア地域関係度解析グループ」(EACRGID)では、一方でグローバルな相互依存を拡大させながら、他方では地域形成を遂げる東アジアの実態を把握するために、政治、経

済、社会/文化の各領域における多様なデータ収集を行い、それらをもとに定量的なアプローチを試みた。その研究成果は、毛里和子・森川裕二編「東アジア共同体の構築4 ネットワーク解析」として公開され(以下、旧版へ、3領域19項目の交流データをネットワーク図として描画するとともに、領域ごとの各分野が相互に影響を及ぼし合いながら地域の形成が進む実態を、「東アジア複合ネット

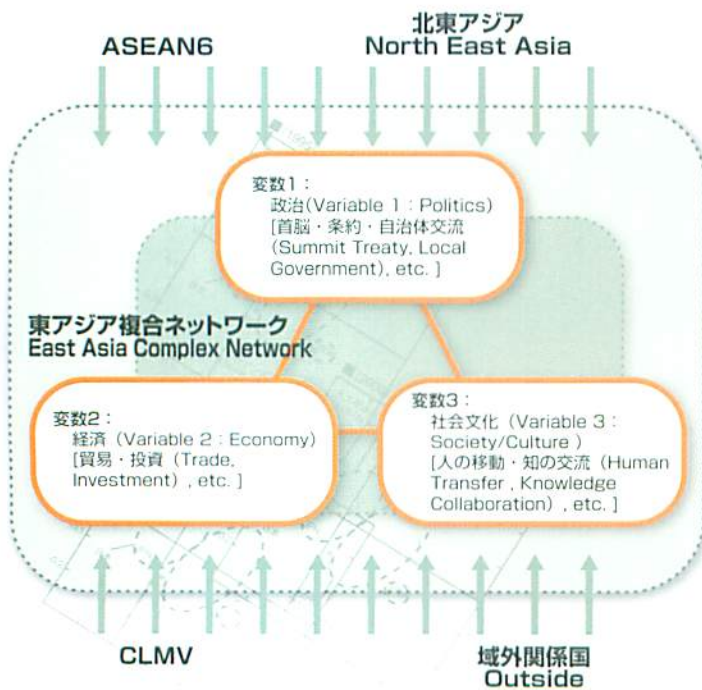
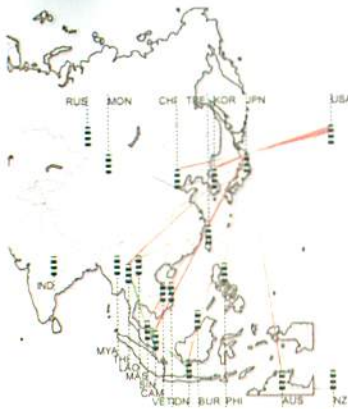


図1 「東アジア複合ネットワーク」の概念

■ 出入国者数(1990-1994)



■ 出入国者数(1995-1999)



■ 出入国者数(2000-2004)



出所：CEICデータを中心に作成

図2 アジア各国間のヒトのネットワーク

ワーク」として提示した(図1)。ともすれば、東アジア協力の将来について楽観と懐疑の両極端に揺れる議論に欠落しがちな実態把握のためのデータを、政治、経済、社会／文化を横断して提供する活動を通じて、我々は看過できない一つの問題にたどり着く。それは、「東アジア共同体」を議論するための素地となる様々なデータの蓄積が遅れていることである。例えば、「アジアでは近年ヒトの交流が進んでいる」とよく言われるがこうした言説を正確に裏付けることの出来るデータを収集することは実は並大抵の努力では出来ない(図2)。

東アジア協力の問題をめぐっての政策的な議論は、個々の研究者の価値判断から自由ではないために、多様な見解が存在するのは確かだろう。しかし、議論のための土台整備がされていない状況で、東アジア共同体の可能性を問う理論的、政策的な議論を行うことは困難である。

こうした認識の下、EACRGDでの調査経験を持つ研究者数名と筆者が集い、「OAS アジア地域のネットワーク解析研究拠点構築(OAS Research Unit of Network analysis in Asia 以下RUNASIA)」プロジェクトを去年の秋から始動させた。

幸いにもワセダアジアレビュー誌上で研究成果等の公表を連載出来ることが決まったので、今号ではプロジェクトの概要と目的、展望などを解説したい。政治、経済、社会／文化の3領域構成になっているが、次号からは、それぞれの研究領域の成果を順に発表していく。

プロジェクトの概要

さて、現在の研究運営体制は毛里和子 政治経済学術院教授、浦田秀次郎アジア太平洋研究科教授をそれぞれプロジェクトリーダー、副リーダーとし、筆者が幹事役を引き受けている(図3)。

我々の目的は、(1) ひろく東アジア共同体を議論するための知的公共財(データ整備など)の提供を行うこと。(2) その活動を通じて、RUNASIAに協力いただく研究者のネットワークをアジア全域に醸成していくこと。(3) 研究成果をとりまとめたワーキングペーパーシリーズをWeb上で刊行し、それら研究成果をもとにアジア統合を学びたい人向けのテキストブックを刊行すること。(4) アジア太平洋研究科のグローバルCOEプロジェクト(GIARRI)との連携を図り、次世代のアジアを形成するアジアの大学生・大学院生を

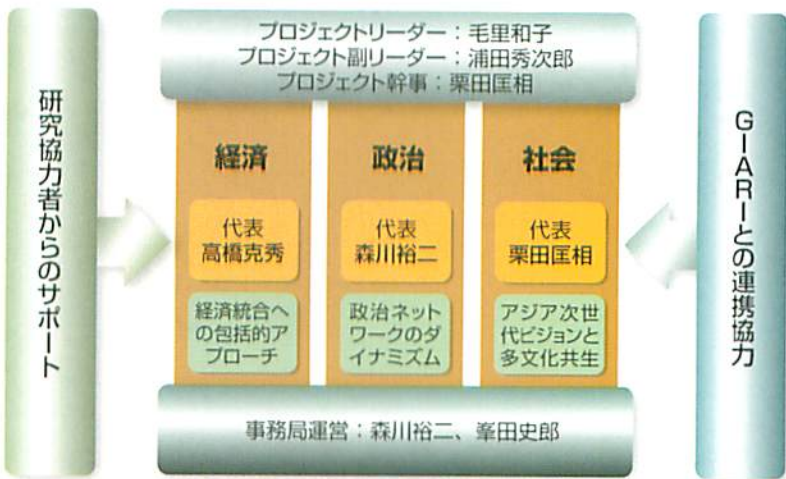


図3 OAS-RUNASIA プロジェクト組織概念図

対象とした意識調査 (Asia-Vision サーベイ) をアジア十数カ国で行うこと、の4つである。

研究成果の蓄積という点では既に複数回の研究会を開催し、その研究成果の一部は RUNASIA の Web (http://www.waseda.jp/pfj-oas-runasia/index

htm) 上に掲載されている。研究会情報なども適宜更新している。研究会への参加を希望される方は是非ご連絡を。

データ整備については、今年度から本格的なデータ収集、旧版からの既存データ更新作業が始められる。こうして収集されたデータは主に Web 上での提供

を考えており、日本語、英語に加え、中国語やその他のアジア言語での公表も考えている。

次に各領域の概要に移ろう。

(1) 政治領域班

EACRGDでの作業は、アジア研究における実験的な試みであるのと同時に、東アジアを語り、域内の共通理解を促進するために必須の情報基盤の構築に資するものと位置づけてきた。しかし、域内共通のデータ構築のために必要な定義や規格統一作業の遅れは非経済分野で特に顕著であり、データ収集の作業を通じて、こうした基盤整備も進めていく。

従来の国際関係論の地域空間概念は地図上に配置した「容器」であり、つねに静止している。つまりそれ自体のダイナミズムを問う分析視点を欠いていた。しかし、実際のアジアは、主体と主体の織り成す「関係のアジア」であり、「変動するアジア」である。こうしたアジアのダイナミズムをとらえるために、旧版のネットワーク概念を踏襲し、量的な交流関係(例えば条約締結数や首脳交流の回数)をネットワークとして図解・詳述し、最新データの更新・追加を試みる。

また、「対立と不和」というテーマを

掲げ、「連携するアジア」「深化するアジア」という言説の妥協性を質的側面(例えば、政府首脳・高官報道・政府声明の言説分析など)から分析する。こうした作業を通じて、東アジア域内の政治変動を量的側面、質的側面から読み解いていく。

(2) 経済領域班

経済分野は、FTAの形成や様々な経済協力等が既に広範に存在しており、アジア統合の分析という点では、最も進んでいる。このため、データの蓄積等に関しても各国のマクロ指標等は、例えばアジア開発銀行などの Web からダウンロードでき、その他の経済指標等も各国の中央銀行や統計局などの Web、あるいはそれらが発刊する資料集などで収集できる。

よって、経済領域班では単なるマクロ経済変数の収集ではなく、サブリージョナルなデータ、つまりは県や省といったレベルのデータ収集や、政治、社会/文化領域と横断的に設定できるトピック(環境問題など)の分析にも力を入れる。今年度はGMS(拡大メコン地域)に関する分析を行っている。

また、アジア経済統合に関する日本語



調査対象大学（予定）：早稲田大学、東京大学、北京大学、清華大学、ソウル大学、延世大学、シンガポール国立大学、タマサート大学、チュラロンコーン大学、マラヤ大学、台湾大学、フィリピン大学、インドネシア大学など

図4 Asia-Vision サーベイのイメージ図

の教科書が存在しないこともあり、来年度の初頭を目処に、学部上級生から大学院初級の学生を対象にしたテキストブックを刊行する予定である。そこでは、アジア経済統合を学ぶ上で必要な経済理論（空間経済学や国際経済学の基礎）の解説や実証分析のツールの解説（CGEやグラビティ・モデル、グリーンジャーテストなど）を行うと同時に、現在のアジア経済統合を考える上でホットトピックを複数取り上げ、執筆者には

基礎文献、問題の現状、今後の展望と検討すべき研究課題などをあげてもらい、アジア経済統合を研究対象とする学生の裾野を拡大することを目指す。

③ 社会・文化領域班

政治領域班と同様に、データ構築の遅れが著しいため、旧版でのデータを改訂するとともに、新たな分野のデータ収集も行う。とりわけソフトパワーや芸術交流といった文化に関するデータの収集に

も力を入れていく。

また前述したアジア地域の未来像を描き出す Asia-Vision (Asian Vision of Next Leader) サーベイ (図4) を、G I A R I との連携協力の下、アジア15カ国の大學生を対象に行う。こうした試みは先例がほぼ無く、研究としての希少性・獨創性が高いばかりではなく、今後のアジア地域の未来を占うという意味では、一般社会からの関心も高いものとなる。調査対象者は、将来国の発展、変化の舵取りに少なからず関わっていく人々である。

ただし、単なる意識調査では面白味に欠ける。そこで、彼らの意識形成過程において、グローバルな相互依存関係の拡大やアジアの地域形成といった現象がどのような影響を及ぼしているのかについて、社会学者のブルデューらが「ディスタクシオン」で行ったような文化的嗜好、家族構成や生活社会についての質問項目などを追加することで構造的な理解、分析を行う。こうした作業から、当該国、アジア地域の未来像を描き出し、調査を通じて、アジア域内の研究者との交流・連携を深めていく。

議論の場を求めて

結局の所、我々が目指しているのは、

東アジア共同体を語る際に必要な共通の土俵、場の提供である。その方法は様々だが、我々は定量的なアプローチをとることによって、分析者の恣意性を出来る限り排除した土俵、場の提供を行いたいと考えている。

アジアには歴史的な関係性の中で克服が困難とされるような問題もある。そうした課題を考えていくためにも、まずは我々が一堂に会し議論を交わすことの出る場や空間が必要なのだ。「ただ世界が人間的となるのはそれが語り合いの対象となった場合に限ります。われわれが世界の物事にどれほど影響されようと、それがどれほど強くわれわれを感動させかつ刺激しようと、仲間とそれについて討論することができるとは、そうしたことはいわゆる人間的なものになるのです」とはアレントの言葉だが、アジアに存在する困難な課題を解決していくために、研究者として人間的な対話を可能とする材料、場を提供することが求められている。そのための一助として本研究が位置づけられればと願っている。この願いが意味あるものと成し得たかどうかは、今後の連載で紹介する我々の成果を見て、読者の方々が議論していただければ幸いである。